

水産の窓

底魚資源調査（冬季）を実施しました

水産試験場では、本県沖の主要な底魚類の資源動向を把握するため、H15年から調査船いばらき丸（179t）により年2回（夏季、冬季）の着底トロール調査（オッタートロール）を実施しています。本調査では、本県沖の水深75～450mまでの海域、合計29定点において、15～30分間（速力3～4ノット）網を曳き、面積密度法により本県海域の現存量を推定しています。今回は令和5年11月～令和6年1月に実施した冬季調査結果についてお知らせします。

1 主要な底魚類の推定現存量の推移

H26年度から今年度までの推定現存量の推移を下表に示しました。また、参考として、県で資源評価を行っている魚種については資源水準も記しました。

漁獲対象種の増減傾向を直近5年間の推移から判定した結果、増加傾向にあるのはヤナギムシガレイ、ババガレイ（なめた）、ミギガレイ（にくもち）、アオメエソ（めひかり）、アカムツ、ユメカサゴ（のどぐろ）の6種、横ばい傾向にあるのはマコガレイ（本まこ）、マガレイ（沖まこ）、ムシガレイ、ヤナギダコ（水だこ）、エゾイソアイナメ（どんこ）、マダラの6種、減少傾向にあるのはヒラメ、アカガレイ（赤がれい）、キチジ（あかじ）、マアナゴ、マトウダイの5種でした。その他、漁獲対象とはなっていないトラザメ（ねこざめ）は横ばい傾向、テナガダラ（とうじん）は減少傾向でした。

昨年度と比較して、増加傾向の魚種数が増加し（3種→6種）、減少傾向の魚種数が減少しました（7種→5種）。新たに増加傾向となった魚種はババガレイ（なめた）、ミギガレイ（にくもち）、ユメカサゴ（のどぐろ）で、特にユメカサゴ（のどぐろ）は小型個体も多く採集され、今後の漁獲増が期待されます。

		(単位:トン)											水準※	過去10年平均
魚種/年度	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	傾向	水準※	過去10年平均	
漁獲対象種	ヒラメ	389	466	310	261	221	247	181	156	253	125	減少	中位	293
	ヤナギムシガレイ	30	48	46	37	52	57	32	65	61	75	増加	中位	48
	ババガレイ(なめた)	33	73	25	32	39	10	20	16	38	54	増加	低位	37
	アカガレイ(赤がれい)	84	96	94	66	73	51	85	25	9	3	減少	—	90
	マコガレイ(本まこ)	5	6	46	26	25	31	3	6	6	7	横ばい	低位	16
	マガレイ(沖まこ)	26	13	13	5	6	8	0	0	0	0	横ばい	低位	15
	ムシガレイ	181	162	248	187	416	324	327	406	409	391	横ばい	高位	275
	ミギガレイ(にくもち)	26	36	26	56	24	52	41	17	48	64	増加	—	37
	ヤナギダコ(水だこ)	119	35	105	122	104	74	102	88	54	99	横ばい	低位	101
	アオメエソ(めひかり)	6	25	14	173	30	28	7	370	57	77	増加	高位	73
	エゾイソアイナメ(どんこ)	73	100	577	347	401	223	1,033	402	188	361	横ばい	—	345
	マダラ	1,104	401	156	68	63	22	7	7	6	9	横ばい	—	234
	アカムツ	5	16	1	3	2	3	1	36	14	15	増加	—	8
	ユメカサゴ(のどぐろ)	10	28	11	32	17	45	11	20	23	59	増加	高位	21
	キチジ(あかじ)	25	3	117	102	71	119	72	38	27	26	減少	高位	58
マアナゴ	54	126	36	80	60	59	42	145	20	35	減少	低位	74	
マトウダイ	29	31	17	20	86	76	47	30	38	35	減少	—	43	
参考	トラザメ(ねこざめ)	2,236	2,739	3,271	1,843	3,183	2,697	3,465	1,697	6,230	2,623	横ばい	—	2,965
	テナガダラ(とうじん)	1,177	501	1,154	3,046	3,588	1,582	2,727	2,190	2,340	213	減少	—	2,107

※:水準:「茨城県産重要魚種の生態と資源」令和6年3月公表予定の資源水準。—は未評価。

表 推定現存量の推移（冬季トロール調査）

2 ヤナギムシガレイ、ユメカサゴ（のどぐろ）の資源状況

今年度の冬季調査の結果、ヤナギムシガレイとユメカサゴ（のどぐろ）は過去10年において最も多い資源量となりました（表）。全長測定データから推定した全長別資源量を計算した結果、ヤナギムシガレイは13～36cm（図1）、ユメカサゴ（のどぐろ）は7～23cmの幅広い組成が確認されました（図2）。両種の資源状態について、国の資源評価ではヤナギムシガレイは最大持続生産量（MSY）を達成する親魚量を上回っており、またユメカサゴは「高位・増加」と判断されていることから、資源状態は良好であると考えられます。夏季調査においてはアカムツとアオメエソ（めひかり）の資源が増加傾向であることを報告しましたが（水産の窓5-No.18参照）、これらの4魚種は今後の漁獲増が期待されます。

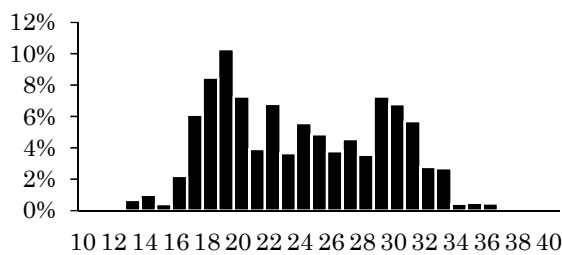


図1 ヤナギムシガレイの全長別資源量

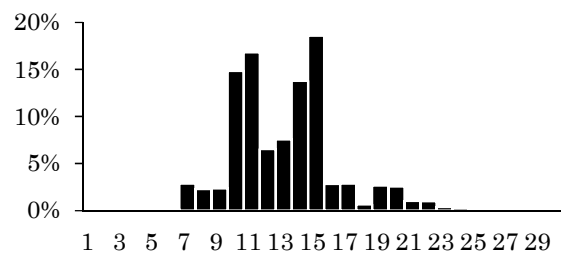


図2 ユメカサゴの全長別資源量

3 近年の底魚類の分布水深の変化

近年、黒潮続流の北偏や親潮の勢力の低下などにより、茨城県海域では海水温が平年よりも高い状態が継続しています。高水温が魚類の分布に影響を与える例はブリやタチウオ等で知られており、底魚類の分布も同様に高水温の影響を受けていると思われます。そこで過去11年間の底魚資源調査（冬季）で得られた水深別推定資源尾数から、ヤナギムシガレイ、ムシガレイ、アオメエソ（めひかり）の主分布水深を求めました（図3）。

その結果、ヤナギムシガレイとムシガレイでは主分布水深が年々沖合へと移動していることが分かりました（図3）。一方で、アオメエソ（めひかり）については水深の変化はみられませんでした。

今回検証した3魚種以外にも、分布水深が変化している可能性が考えられます。今後も、海洋環境の変化が底魚類に与える影響について、継続した調査を進めていきます。

（水産試験場 定着性資源部）

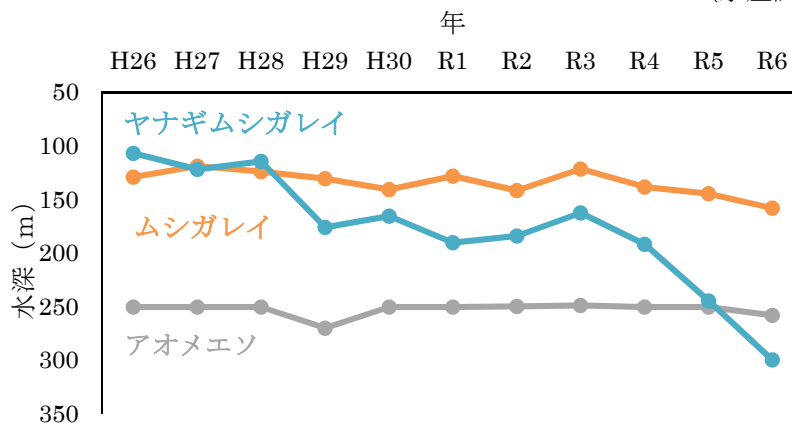


図3 主分布水深の推移